



現在の硬石山と採石の様子



▲砕石機で岩石を細かく砕きます



▲手作業で採り出しをしていたころの道具

▲爆破した岩石をダンプカーで運びます

約一千万年〜千五百万年前、地下の深い所から地表一〜二kmまで上昇したマグマが固まってできた岩石、石英安山岩が硬石です。その後の地殻変動で、硬石山（標高三百七十一m）ができました。軟石の発見と同様、札幌本府づくりのために行われた石材調査で、開拓使請負人大岡助右衛門が、明治五年に硬石山を発見。翌明治六年ころから本格的な採石が始まりました。建物の骨材、道路や鉄道の敷石などに使われ、札幌軟石に対し札幌硬石と呼ばれてきました。採石が始まった当初は、道路が開通しておらず、近くを流れていた豊平川を利用し「いかだ」で創成川取水口まで流送していました。明治十二年に運搬道路が開通すると、馬車や馬そりを使い石材を運搬するようになりました。トラックが使われるようになるまでは、馬車や馬そりが運搬手段の中心だったのです。

硬石の採石量は日を追って増加し、明治十三年には一万八千三百九個を記録しました。明治十四年建築の豊平館をはじめ、同二十一年には赤レンガ庁舎として親しまれている旧道庁本庁舎など、多くの建築物の礎石として重要な石材となりました。戦前は、建築物の土台石や石垣、堤防工事などに使用する間知石（三十cm角の角すい型の石）として多く利用されてきました。しかし、軟石同様、コンクリートの普及に伴い、硬石は建材用からコンクリート原料や道路舗装用の碎石（碎石機で細かく砕いた石）としての役目を担うようになりました。現在、硬石山では、三社が硬石を採石しています。三社は持ち回りで、年に一度植樹祭を行い、採石地の緑化事業を行っています。いち早く碎石の生産を始めたハラダ産業株式会社は、硬石山の歴史や現在の採石の様子を学んでもらうため、毎年、地元にある藻岩南小学校の児童たちの見学を受け入れるなど地域へ協力しています。

同社の牛来孝三常務は「硬石山の石は、百三十年以上も前から札幌の街づくりに深くかかわってきました。今も家や学校のコンクリート、道路の舗装、公園の景観用など、いろいろな所に使われています。これからも皆さんの生活の中に、さまざまな形で利用されていくことでしょう」と語ります。



▲硬石山から軟石肌)を望む



▲石山緑地(軟石)



▲土台石や窓枠に硬石を使用した旧道庁本庁舎【(中)北3西6】



▲土台石に硬石を使用した豊平館【(中)中島公園1-20】

硬石を使用した建造物

